

国際課活動レポート

◆和歌山県知事シンガポール・タイ・香港訪問【5月25日～31日】

仁坂知事は5月25日～31日の日程で、シンガポール、タイ、香港を訪問しました。

シンガポールでは、大手旅行会社や食品輸入業者等を招き、観光客誘致・県産品輸出の拡大を目的としたプロモーションを行いました。また、和歌山県が誘致を目指す統合型リゾート（IR）を視察しました。

タイでは、バンコク市内で和歌山プロモーション・レセプションを開催し、和歌山県の観光、食、企業及びタイとの友好協力関係をテーマとしたプレゼンテーションを行い、参加者に和歌山の魅力を紹介しました。また、食品見本市“THAIFEX2019”の会場において、和歌山県とタイの更なる経済交流の拡大を目的として、同国商務省と覚書を締結しました。さらに、ソムキット副首相およびユッタサック観光庁総裁ともそれぞれ会談し、今後の交流の促進について意見交換を行いました。

香港では、訪日団体旅行会社最大手である EGL ツアーズの創立33周年記念祝賀会に出席するとともに、和歌山県観光大使を務める同社社長を訪問し、県内への観光客誘致に向けてPRしました。また、香港貿易発展局マーガレット・フォン総裁と面会し、今後の経済交流のさらなる活性化について協議しました。

◆ナミビア共和国大使【6月8日～10日】

今年9月に日本で開催されるラグビーワールドカップの際、上富田町がナミビア代表チームの公認キャンプ地に決定したことを受け、関連する視察等を主な目的として、ルスウェニョ駐日ナミビア共和国大使が来県されました。9日には上富田町で大使を歓迎するセレモニーが開催され、大使はナミビアの国旗を振る子供たちの出迎えを受けました。大使は「和歌山はナミビアとは異なる豊かな緑に恵まれた美しい場所。居心地がよく第二のふるさとのように感じる。」と話されました。

初めての日本開催で盛り上がりをもせるラグビーワールドカップ。日本はもちろん、和歌山とご縁ができたナミビアもぜひ応援しましょう！



中国の高考「ゴォーコォー」(大学入学試験)

6月7日～9日、年に1度の中国高考が行われました。高考は「全国普通高等学校招生入学考試」と言い、1976年文化大革命後、鄧小平氏が再開した大学入試制度です。日本と違い中国では、原則、大学や専攻ごとの試験は行われず、この高考の結果のみで合否が決まります。ですから、この3日間は、今年の受験生1031万人の、そしてその家族の運命を変える3日間であったと言えます。

中国には大学が1237校、短大が1359校あり、2018年の進学率は81.8%で、多くの受験生は高考の結果により、次の教育段階へ進むことができます。しかし、これらの大学のうち、トップレベルの大学は10数校しかありません。理想の大学へ進学することは、全受験生の最大の願いです。中国では昔から教育を重視し、各家庭も教育に投資を惜みず、受験生は、この一生に一度きりのチャンスを掴みたいと強く思います。

このようにして、大勢の学生が同時に“狭い棒状の橋”を渡るような状態が生まれています。例えば、去年の受験生923万人のうち、名門・清華大学の合格者は6558人、つまり合格率はたったの0.07%でした。

中国の高校も日本と同じく3年制です。多くの高校は学生がよい成績を収められるよう、最初の2年で高校3年分の授業内容を全て終わらせ、最後の1年を復習にあて、高考に向けた特別訓練、主に模擬試験に多くの時間を割くこととなります。週6日学校に通い、1日5、6時間の睡眠で、食事・トイレ・通学時間以外は全て試験、講習に充てられます。

このように知力だけではなく、体力も必要な高考「戦争」。もし体調を崩し、2日間休んだとしたら、2日分の模擬試験用紙が学校の机の上にも山積みになっています。

大学入試に重点を置いた高校は、大学進学率が高いため、高校入試の段階から高い人気となります。つまり、高考の「戦争」はすでに高校入学前から始まっているのです。

この高考という“戦争”を切り抜けるには、家族の協力が不可欠です。母親は、受験生の栄養、休憩、スケジュールを全て管理し、受験生が全力で知識の吸収と試験に集中できるよう、全面的にサポートします。買い物といった用事は勿論、母親が学校まで送迎する姿をよく見かけます。父親は“サポート役のサポート役”に徹します。

中国では6月は夏ですから、気温が高い地域では30度くらいになりますが、家族全員で受験生を試験会場まで送り、その暑さの中、外で試験終了をずっと待ち続けます。

近年、政府も高考を重視していて、試験日には警察官の人数を増やし、警備にあたります。高考は受験生、家庭、学校、社会、政府に関わる試験と言えます。



【試験会場の外で待っている保護者達】

異文化体験記 ◎和歌山県職員による「異文化体験記」です。

今回は、濰坊市の伝統工芸であり、伝統文化でもある「凧揚げ（たこあげ）」について、ご紹介します。

濰坊市は、北京、天津、江蘇省南通と並び中国凧の四大産地の一つで、その歴史は一番古く、凧の発祥地とされています。凧の起源は諸説あるようですが、少なくとも春秋戦国時代には存在し、当時は軍事用として信号の伝達などに使用され、その後、貴族から庶民の娯楽へと広まっていったと言われています。明・清時代の濰坊市には、凧作りに従事



する専門職人が生まれ、多くの凧作りの工房や商店が並び、街の至るところに凧が掛かり、全国各地から商人がその凧を買い付けにやってきました。濰坊市内の「楊家埠（ようかふ）村」という地区には、昔の建築物を模した灰色のレンガ造りの建物が立ち並び、凧作りの看板を掲げた商店が多く存在しています。今でも、多くの地元の人や観光客で賑わっていて、その風景から当時の街の賑わいを感じ取ることができます。加えてここには、中国一の規模を誇る凧工場があり、職人たちが手作業で作る凧の生産工程を見学することができます。この凧作りの技術は、中国の無形文化遺産に選ばれています。

濰坊市で作られている凧は、日本の凧とは異なります。形状や色が豊富で身のまわりの物や縁起の良い物など、あらゆる物を凧で表現します。例えば、鷲、金魚、トンボ、蝶、龍、人など多くの種類があります。その他、立体的な形状をした凧もあれば、多くの凧を連結させて作る全長17mの巨大な凧もあります。美しくカラフルに色づけされた様々な種類の凧が大空に揚がる姿は、空飛ぶ芸術品として、中国の人々に愛好されています。



また濰坊市では、1984年から毎年、国際凧揚げ大会が開催されています。今年の4月に行われた第36回大会には、アメリカ、フランス、オーストラリアやブラジルなど65の国と地域の人々約800人が参加していました。私もその大会を見学に行きましたが、40haという広大な芝生の上で、大空を彩る100個以上の凧の姿は壮観でした。また、各国の凧愛好家の人々が創意工夫をして作った様々な凧を楽しそうに揚げる様子を見て、私も凧揚げをして楽しく遊んでいた頃を懐かしく思い出しました。この大会の開催を通じて、濰坊市は「世界の凧の都」として呼ばれるようになったそうです。



凧揚げは、日本ではお正月の遊びですが、濰坊市では、お正月に関わらず、一年を通して街の広場などで凧揚げをしている人を見かけます。凧揚げは、濰坊市の人々にとって伝統的な習俗であるとともに、大好きな遊びの一つです。そして、街の発展と世界各国との文化交流に関する重要な役割を担っています。

〈川口喜寛（2019年4月より山東海峡国際旅行社にて研修中）〉

英語コラム

“We are XXI!”



“One for all, all for one.” 日本ではラグビーの精神を表す言葉としてよく引用され、みなさんも一度は耳にしたことがあるのではないのでしょうか？「一人はみんなの為に。みんなは一人の為に。」という意味で使われることが多いのですが、「一人はみんなの為に。みんなは一つの目的（勝利）のために。」という解釈のほうが、ラグビーというスポーツを正しく表しているとも捉えられるようです。

さて、日本で（アジアで）初めての開催となるラグビーワールドカップが近づいてきましたが、前回のワールドカップで南アフリカに奇跡の勝利を収めた日本代表チームは自国開催を追い風に、今回もさらなる活躍が期待されています。日本チームの愛称は“Brave Blossoms”「勇敢なる花（桜）の戦士」。確かにユニフォームにも桜のマークがありますよね。各国代表の愛称を見てみると、世界ランキング第1位のニュージーランドは”All Blacks”、イングランドは“Red Roses”と呼ばれています。今回公認キャンプ地が上富田となったナミビア代表チーム“Welwitschias”。調べてみると日本語では「奇想天外」と呼ばれるナミブ砂漠に生息する希少植物で、巨大かつ1000年以上生きるとも！愛称が表すチームの特徴を理解して観戦するのも面白いですね。

.....
次号は9月末発行予定です。お楽しみに♪

★ご意見・ご感想はこちらへお願いします。【和歌山県国際課】Email : e0223001@pref.wakayama.lg.jp TEL : 073-441-2055

☆わかやま国際交流通信はホームページにも掲載しています。

<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/022300/kokusaikouryu/mailmagazine/mailmagazi>

HPへのアクセスは

